

「わたしはなお告白しよう、『御顔こそわたしの救い』と」

2020年5月3日

旧約聖書：詩 42・43 篇

新約聖書：ヨハネによる福音書 4章 1～26 節

説教者：半田教会 横山良樹

今朝は、詩編と福音書を通して、御顔を仰ぐことが出来ない詩人の「渇き」と、それでもなおわたしは主を待ち望むという絶望に抗う姿勢、そして、ヨハネによる福音書からその「渇き」に気づくことなく生きていたサマリアの女性を救いへと導かれたキリスト・イエスの働きを通して、神の御顔を仰ぐ礼拝の意味を捉えたいと願っています。

まずよい機会ですから、少し時間を頂いて、詩と聖書の祈りの教科書ともいべき詩篇について見ておきます。わたしは詩を読むことが好きで、学生時代は、近現代の代表的な詩人の作品を読んだものです。もちろん日本にはもっと古くから和歌などの短歌や、俳句といったものがあります。そうしたものに実際に親しんでおられる方も皆さんの中におられるでしょう。わたしも百人一首をやらされたおかげで今でも何首かはそらんじられると思いますが、万葉集にはあまり手が出ませんでした。五七五七七や、五七五といった決められた字数の中に様々な事象を読み込んでゆく短歌や俳句の世界は日本が世界に誇る文化であり、精髓とも言うべきものでしょう。長い時間の中で、また多くの人の手によって磨き上げられ、その中で鑑賞に堪えるものが愛唱されて、わたしたちに残され、それがさらに新たな読者を生み、作者を作り出してゆく。そして日本人の感性を生み出してゆく。育ててゆく。詩という文学のジャンルの特色は

何よりも暗誦され、持ち運びされてゆくところにあります。人間の喜怒哀楽、おりおりの感情が、短い詩形の中にパッケージされてきました。そして、それらの詩を朗読するとき、口の端に乗せてみると、わたしたちはそれらの詩のもつ豊かさや、感情を、またあらたにして味わうことが出来るといったらよいでしょう。民族の精神は、初めに詩に現われると言われます。つまり人間の営みの中で、おりおりに抱く思いや、感慨といったものがもっとも生のかたちで、抽出されていく分野は小説といった形式ではなく、詩や歌だということでしょう。そこにその民族が持っている感性や特質といったものが現わされてゆく、共有されてゆく、そうした力を詩はもっている。そして、それはイスラエルの場合には詩篇という韻文の文学として、わたしたちに残され、現代に伝えられたのです。しかも、それは単なる古典ではなく、多くの信仰者によっていまも用いられ続けている現役の祈りの書であるところに特色があります。みなさんの礼拝でもプログラムの中に詩編交読を入れておられますね。150篇からなる詩篇は礼拝の中で司会者と会衆が交互に朗読したり、メロディをつけてそのまま讃美歌として歌われたりしてきました。ヘブライ語では「テヒリーム」と呼ばれ、その意味は「讃歌」・「讃美」です。話を戻しますが、民族の精神は詩に現れると言ったときに、ではイスラエルのどんな姿がわたしたちの手元に残された詩篇から浮かび上がってくるのでしょうか。どんな心のかたちがそこに刻まれているのでしょうか。それは日本の詩歌が伝えようとしてきたものとはまた違った姿を帯びたものと言わなければなりません。呼びかけと応答に終始しています。日本の詩歌にも相聞歌と言って男女が互いに呼び交わすような連句の形式がありますが、イスラエルの場合、呼び交わす相手は人間ではありません。天地を創造し、イスラエルを

慈しみと憐れみをもって導かれる神に焦点があわせられています。詩篇とは讚美の歌だと先ほど申し上げました。人々は神の前で喜び、嘆き、導きを求め、助けを乞い、信頼を告白し、そして苦難の際の避けどころとして祈りを通して、この方の下に身を寄せるのでした。保護を求め、暗い夜の間を守られ、そして感謝の告白をするのでした。そのような歌が多くの詩人によって歌われ、磨き上げられ、残されてきました。作者はダビデに帰せられていることが多いのですが、彼はイスラエルの集合人格のような扱いであり、つまり詩の背後に日本人がいるといったような意味での集合人格ですね。現在、詩篇に残されているこれらの詩の背後には、それを支えとし、過酷な歴史を生き抜いてきた多くの人の列がある。これらの詩を彼らは口ずさみ、朝ごとの祈り、夕べの悔い改め、苦難や病の際の支えとしてきたのです。その中で、詩 42・43 篇はおそらく今わたしたちが置かれているコロナウイルス感染症対策で、緊急事態宣言が全国に発令されている状態ではもっとも身近に感じられる詩ではないかと思うのです。この詩には、

「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ

なぜ呻くのか

神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう

「御顔こそ、わたしの救い」と。

わたしの神よ」(詩 42 篇 6 節・12 節・42 篇 5 節)

というフレーズが三回、繰り返されます。このリフレイン（繰り返し）が詩篇 42～43 を三分割しています。第一段落は詩人による過去の回想で、

涸れた谷に鹿が水を求めるように  
神よ、わたしの魂はあなたを求める。  
神に、命の神に、わたしの魂は渴く。  
いつ御前に出て

神の御顔を仰ぐことができるのか。

—とあり、「渴きと嘆き」のパートです。この詩人はエルサレムから遠く離れた場所にいます。7節に「ヨルダンの地から、ヘルモンとミザルの山から」とありますので、イスラエルの北方、辺境と言ってよい場所です。この詩は「コラの子の詩」(1節)とあります。コラは、祭司の家系の一派でしたが、当時、なんらかの派閥争いによって神殿をおわれ、この北の地に流れてきたようです。そこで詩人は「渴き」を覚えているのです。それは神の御顔を仰ぐことのできない(つまり礼拝の許されないことからくる)魂の渴きです。命の源から断たれてしまっていることが、涸れた谷に鹿が水を求めるように、わたしの魂は、あなたを求める、と告白されているのです。この詩人の境遇は古代世界の最大のキリスト教思想家であるアウグスティヌスの有名な祈りに通じるものです。いわく「神よ、あなたは、わたしをあなたご自身に向けてお造りになりました。ですから、わたしはあなたのうちに憩うことなしには安らぎを得ません」

という祈りです。この祈りもわたしは大好きなのですが、こういう渴きに対して、どれだけ自覚的かということはなかなか難しいですね。しかし、わたしたちは危機的な状況、つまり苦難や、迫害や、非常事態に陥った時、日常が壊れて、不条理な状態に置かれた時に、神を求めずにはおれません。超越者との関わりを願う存在です。しかし、実際に礼拝の手段を奪われていたらどうでしょうか。この詩人の苦悩はそこにあり、それで

もなお「御顔こそ、わたしの救い」と告白し、「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ」と繰り返し、みずからを叱咤し、神を待ち望むと告白するのです。「待ち望む」というヘブライ語はもともと綱や、縄を意味する言葉で、相手に縛り付ける、結びつける、巻きつく意味があるそうです。祈りの本質を教えられる思いがいたします。この詩を愛唱した世々の信仰者の列に、わたしたち自身も身を添わせることによって、祈りの言葉を獲得し、人知を越えた神の平安に与りたいものです。

さて今日はもう一か所、新約聖書から、「渇き」つながりで「サマリアの女」の個所を選ばせていただきました。主イエスが正午頃、渇きを覚えて井戸のかたわらで休んでおられるところにひとりの女が水を汲みに来る。そこで始まる命の会話です。みなさんもよく知っておられる個所だと思います。時間の関係でかいつまんでの紹介に留めますが、水をめぐる問答から、イエスさまが、「この水を飲む者はだれでも渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は渇くことがない。わたしの与える水は、その人の内で泉となり、永遠の命にいたる水が湧き出る」と言われます。すると女は、渇かないように、汲みに来なくてもよいように、その水を下さいと返します、彼女はまだ飲料水と思っていますが、それが、わたしたちの喉ではなく、魂を、存在の渇きを癒す水であることを、真に交わりに生きることを可能にする生ける水であることを明らかにするために、主イエスは、あなたの夫をここへ連れてきなさいと、いささかとっぴに見える招きを発するのです。「夫はいません」と婦人が応えると、主イエスは「あなたには5人の夫がいたが、今いるのは夫ではない、あなたは正直に答えたわけだ」と言われます。これは象徴的に解すれば、この女性が何に仕えていたかということ。あるいは、どういう存在に結び合わされて生きてきたかという

ことです。まことに仕える存在をもっていない。そのために充足感がなく、次から次へとみずからを満たすものを求めてとっかえひっかえ生きてきたのではないか。こうした存在の渇きは、偶像礼拝では満たされません。さきに紹介したアウグスティヌスの祈りを思い出してください。この部分が破れていたからこそ、この婦人は、夕方に汲むのが当たり前の水汲みを炎天下に人目を避けて行うようになったことが推測されるのです。ここで扱われているのは、わたしたちが何を伴侶として歩むのか、人生の中心にすえて歩むのかということであり、結婚とは生活共同体をつくってゆくことですが、今いるのは夫ではないというような、真に仕えあう関係にない存在は、魂の渇きをいやすものとはなりません。そのために、この会話は必然的に、礼拝の問題に移ってゆくのです。それは人生において何を拝むのか、何を中心とするのかということです。礼拝する場所として、この婦人は、自分たちはこの山で、ヤコブがさだめたこの山で礼拝をしますと言います。先祖からそうだったと言います。しかし、場所が問題なのではない。人間に必要な礼拝は、霊と真理をもって献げる礼拝である。そのような礼拝こそが神の喜ぶところ、神の求めたところなのであって、この山でも、エルサレムでもないところで、真実の礼拝が始まる。それがあなたの欠乏を埋め、渇きをいやし、あなたのうちに命の泉を湧き出でさせる礼拝となる。あなたは遂に真に仕えるべき方、花婿となる方を持つであろう、会話は、そこまで行くのです。メシアと呼ばれる救い主が来られることは知っています、と応えた婦人に対して、主イエスは、それはあなたと話しているこのわたしであるといわれました。主イエスは、この婦人に、ご自身をお与えになるのです。5人も夫を変えてきた婦人、いまも違う人と暮らしている婦人、その婦人に、まことに仕えて

よい方、結び合わされることが喜びであるご自身を差し出されたのです。主イエスは、喉が渇き、疲れてもおられましたが、そこに女性が水を汲みにくるのを目にしたとき、自分の渇きをいやすための「手段」として女性を扱うのではなく、相手の救いを「目的」とした会話に踏み込んでいった。そして、会話の中で、彼女の目を開き、彼女の問題を担い、その解決としてまことの救い主を真理と霊をもって礼拝することを教えられた。人生の真実の同伴者を示された。ここに救いの道が備えられたのです。この中心が据えられること、わたしたちの生活の中に、この生ける水を惜しみなく下さる方との出会いの場、礼拝の場が備えられることが重要です。神さまは主イエス・キリストを通して、そのように礼拝することを許してくださったのです。この出会いを通して、井戸端で救い主に会った婦人は交わりに生きる者へと変えられてゆきました。村人全員に、ここに救い主がいますということを知らせる証し人にもされました。救い主から注がれた命の泉が、今度は彼女を通して、周囲にあふれ出してゆく。この命の交わりの中に置かれることで、わたしたちも惜しみなく分かち与える者、愛のために労苦する者として生かされる。この救い主イエスに出会って頂きたい。ともに主を賛美する礼拝に与って欲しいというのが、わたしたちの願いなのです。コロナウイルスとの闘いが続いています。命の源であるお方との礼拝をわたしたちの生活から切り離すことはできません。また共にあい集って、主を賛美する日が与えられますように、みなさまと祈りをあわせませう。

お祈りいたします。